

竹田 正義¹：京都府京丹後市箱石浜に漂着したアカウミガメ幼体

Masayoshi TAKEDA¹ : Juvenile of sea turtle, *Caretta caretta*, stranded on the beach of Hakoishihama in Kyotango City, Kyoto Prefecture, Japan

日本の砂浜では、アカウミガメ *Caretta caretta*、アオウミガメ *Chalonoa mydas*、タイマイ *Eretmochelys imbricate* の3種が産卵する（吉岡・亀崎 2000）。このうちアカウミガメは、4月から8月にかけて主に南西諸島から九州、四国、茨城県以南の本州太平洋側の砂浜で産卵する。一方、各地の沿岸ではウミガメ類が多数漂着し（例えば、石井 1999；中西 1990）、中でも日本海沿岸においては、冬期に水温の低下などの影響で衰弱した個体が、北西の季節風による吹送流によって漂着する（例えば、西村 1973；中西 1990）。

日本海におけるウミガメ類については、山下（1995）が日本海で記録された捕獲漂着例443個体について総括している。それによると、12月から2月にかけての冬期に漂着したアカウミガメのうち、甲長80cm未満の亜成体または幼体は、わずか15個体であった。筆者は、2012年12月31日、京都府京丹後市の箱石浜における漂着物調査の中で1頭のアカウミガメの幼体を確認し、希少な事例と思われるのでここに報告する。

調査地および漂着記録

京都府京丹後市の箱石浜（図1）は、丹後半島の西側に位置し、冬期を中心に漂着物が多いことで知られる（例えば、石井 1999）。丹後半島周辺では、アカウミガメ、アオウミガメ、タイマイが定置網などで混獲され（竹田 2004a, 2005）、冬期にはタイマイ（竹田 2004b）やアオウミガメ（竹田 2005）が漂着した事例もある。

2012年12月31日午後1時頃、箱石浜において、漂着した1頭のアカウミガメを発見した。本個体はすでに死亡していた。本個体を姫路市立水族館に持ち帰り、各計測および胃内容物の調査を行った。

結果および考察

本個体の直甲長は83.1mm、直甲幅は81.7mm、体重は119.2gであった。マイクロチップ等の標識は無かった。背甲側には、背甲および頸部に計3個のエボシガイの仲間が、背甲に1個のフジツボの仲間が付着していた（図2-1）。腹甲側には、右前肢に3個、腹甲に5個のフジツボの仲間が、腹甲の左側と右後肢にはコケムシの仲間が付着していた（図2-2）。本個体は、甲長の大き

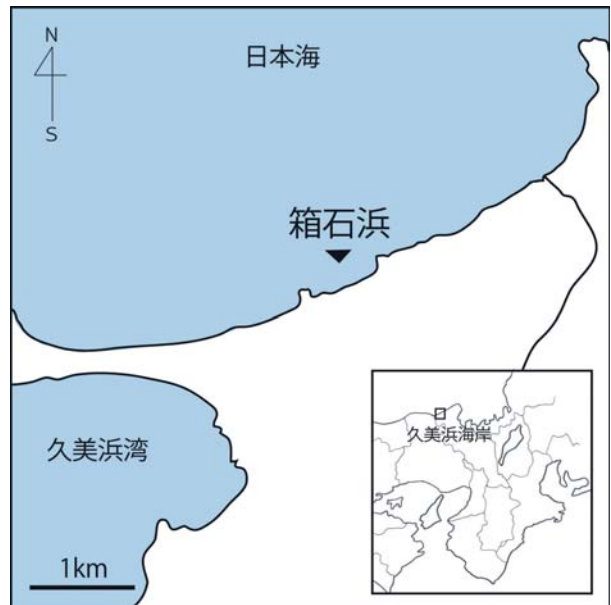


図1 京都府京丹後市箱石浜の位置。



図2 漂着したアカウミガメ幼体の外観。 1. 背甲側。

2. 腹甲側。

さから2012年の夏に生まれた幼体と考えられる。一般的に、日本の太平洋沿岸の砂浜で孵化したアカウミガメの幼体は、黒潮の流れに乗って北太平洋上を東に浮遊しながら漂流生活を送る(石原 2012)。ところが、新潟県沿岸で本種幼体が漂着した事例(野村 1993)や、八重山諸島から放流された甲長20cm未満の本種幼体が日本海で再捕された事例(亀崎 1992)など、本種幼体が日本海沿岸でまれに漂着することがある。これらはいずれも対馬暖流に乗って日本海を北上し、冬期に衰弱して漂着したと考えられている。これに対し、遊泳力のあるウミガメ類の成体では、冬期に水温が低下すると、表面水温20°Cの境界を追うように日本海を南下した事例(竹田ほか 2006)が報告されている。

本個体を発見した当時の天候は雪、気温は最寄りの間人観測所で1.3°C、風速は同観測所で南南西の風2.9m/s、波の高さは最寄りの経ヶ岬で約3.4m(いずれも気象庁ホームページ)、海の表面水温は約14°C(海上保安庁海洋情報部ホームページ)であった。このような気象状況から、本個体も対馬暖流に乗って日本海に入り込んだ後、衰弱し打ち上げられたものと考えられる。

胃には少量の内容物が残り、未消化の甲殻類や端脚類が認められた。このことは、本個体が漂着の直前まで餌料生物を摂食していたことを示唆している。なお、プラスチックなどの人工物は認められなかった。

2012年11月から2013年3月にかけて、福岡県から青森県の日本海沿岸では、本例も含めて計167個体のウミガメが漂着した(亀崎 2013)。この数は、例年の数と比較して極端に多い。これらの個体の約7割がアカウミガメであり、そのうち86%が甲長20cm未満の幼体であった(亀崎 2013)。これらの個体は、孵化した場所から対馬暖流に乗って日本海に入り込み、何らかの原因で衰弱あるいは死亡して漂着したと考えられている。無効分散や死滅回遊は、対馬暖流に乗って日本海に入り込んだ生物が、冬を越せずに死滅するという説(西村 1973)である。しかし、ウミガメの場合、衰弱し生きた状態で漂着する個体も確認されている(山下 1995)。2012年12月12日には、北海道襟裳岬で、甲長約10cmのアカウミガメの幼体が生きた状態で漂着している(日本ウミガメ協議会ウミガメ速報)。この事例は、対馬暖流に乗って日本海を北上した個体が、津軽海峡を抜けて太平洋に分散する可能性を示唆している。日本海に入り込んだウミガメ類が、日本海をどのように利用し季節回遊するのか大変興味深い。今後もウミガメの漂着に注目し、継続的に記録を残していくことが重要である。

引用文献

- 石原 孝 2012. ウミガメの自然誌—産卵と回遊の生物学. pp., 57-84. 東京大学出版会, 東京.
- 石井 忠 1999. 新編漂着物事典. 380pp., 海鳥社, 福岡.
- 海上保安本庁海洋情報部ホームページ (<http://www1.kaiho.mlit.go.jp/KANKYO/KAIYO/qboc/index.html>)
- 亀崎直樹 1992. 孵化後飼育したウミガメ類の標識放流調査. うみがめニュースレター. 13: 12-14.
- 亀崎直樹 2013. 日本海ウミガメワークショップの開催. 神戸市立須磨海浜水族園機関紙うみと水ぞく. 32 (2): 8. 気象庁ホームページ (<http://www.jma.go.jp/jma/menu/report.html>)
- 中西弘樹 1990. 海流の贈り物. 254pp., 平凡社, 東京.
- 日本ウミガメ協議会ウミガメ速報12-21 (12/16).
- 西村三郎 1973. 海流と生物の長距離分散. 海洋科学. 5: 61-68.
- 野村卓之 1993. 新潟県沿岸におけるアカウミガメ幼体の冬期漂着(1992-1993). うみがめニュースレター. 16: 12-13.
- 竹田正義 2004a. 京都府丹後半島周辺のウミガメについて. 日本ウミガメ協議会機関紙マリンター. 5: 7-8.
- 竹田正義 2004b. 京都府北部の海岸で保護されたタイマイの排泄物中に認められた異物について. うみがめニュースレター. 60: 1.
- 竹田正義 2005. 但馬および丹後地方におけるウミガメ類の記録. うみがめニュースレター. 63: 24.
- 竹田正義・稲垣芳雄・高田厚志・蛭谷昌敏・亀崎直樹・島 達也・水野康次郎・高橋大輔・宮嶋淑久・石原 孝 2006. 日本海におけるアオウミガメの衛星追跡調査. うみがめニュースレター. 66: 21-22.
- 山下 郁 1995. 日本海におけるウミガメ類の来遊について. 富山大学教育学部地理学教室年報. 3: 155-173.
- 吉岡 基・亀崎直樹 2000. イルカとウミガメ. 178pp., 岩波書店, 東京.

(Received Sept. 24, 2013; accepted Oct. 15, 2013)

¹ 〒670-0971 兵庫県姫路市西延末440 姫路市立水族館

¹ Himeji City Aquarium, Nishinobusue 440, Himeji, Hyogo, 670-0971 Japan